

No.2908

北部タイにおけるコン・ムアンの民族的アイデンティティ生成過程に関する人類学的研究

首都大学東京大学院人文科学研究科

博士後期課程

斎藤俊介

本研究は、北部タイの村落部における人類学的フィールドワークに基づき、近代化や国家政治の影響を受けるなか、現地社会の多数派民族であるコン・ムアンがいかなる文脈の上でアイデンティティを受容するのか、明らかにするものである。

20世紀初頭以降、コン、ムアン社会は中央集権的な近代タイの国家制度に取り込まれながら、なお独自のエスニシティを維持してきた。コン・ムアンの特徴として、常に隣接する多くの諸民族を自集団に取り込んできたことにより、集団としての凝集性を保ちつつも、民族的/地理的区分にまつわる厳密な共通認識を持たないという点が挙げられる。本研究では、伝統的に人々の共同性を育んできたコン・ムアン特有の祖霊信仰にまつわる諸儀礼や、儀礼以外の日常的なコミュニケーションに着目する。

1年目の研究活動では、主にコン・ムアン社会特有の祖霊信仰をテーマに調査を進めてきた。当該社会に生きる人々が、信仰を通じて、先祖代々住んできた土地との感情的な紐帯を持ち、過去からの連続性を認識するありように着目することで、人々のアイデンティティ受容の過程を考察してきた。2年目の研究活動では、「儀礼以外の日常的なコミュニケーション」に関するデータの収集・分析にも取り組む予定である。その際、民族的アイデンティティをどういった対象から読み解くのか、というエスニック・マーカースの選定に関する問題がある。つまり、儀礼からみえてくる「アイデンティティと土地の連続性」という視点の他にも、民族的アイデンティティを読み解くため、生活実践の場から新たに何らかの対象を設定する必要がある。

そこで、当該社会における「人と動物との関わり合い」という位相に着目し、とりわけ「象」をコン・ムアンのエスニック・マーカースとして捉え直すことで、そこから派生する人々の日常的なコミュニケーションに注目したい。